

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K16893

研究課題名(和文) Identityの構築の軌跡と語用論的第二言語運用の変容:長期留学を通して

研究課題名(英文) A Process of Identity Construction and Pragmatic Language Use in Second Language: Through Long-Term Studying Abroad

研究代表者

野上 陽子 (NOGAMI, Yoko)

関西学院大学・法学部・准教授

研究者番号：90733999

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、第二言語(L2)学習者のidentity構築の過程と、L2学習者のidentityと語用論的L2運用の関係性の2点を明らかにすることにあつた。について、長期留学中の日本人英語学習者を対象として行なった調査の結果、実際の会話の場面において、調査対象者たちが様々な言語・文化・記号論的な資源を用いながらお互いにidentityを形成していく様相が明らかになった。一方で に関しては十分な成果を上げることができなかつたが、今後 について調査・考察するための方法論として、ナラティブ研究と談話研究を融合させることの有効性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の主たる学術的意義は、長期留学における実際の言語使用という観点から、これまでのL2学習者のidentity研究を補完する点にあつた。長期留学しているL2学習者がいかなる状況で、また具体的にどのように肯定的identityを構築しているのかを解明をすることは、いわゆるグローバル人材育成や大学教育における海外留学プログラムの改善に資する知見の導出につながるものと考えられる。この点に、本研究の社会的意義が認められる。

研究成果の概要(英文)：The study aimed to investigate 1) a process of L2 users' identity construction and 2) the relationships between L2 users' identity construction and pragmatic language use. The participants in the study were three Japanese users of English who took part in long-term study abroad programmes in different parts of the world. Regarding Aim 1, the study revealed that while L2 users interact with others, they utilize diverse linguistic, cultural and semiotic resources in the mutual process of constructing and negotiating identities. Meanwhile, as for Aim 2, a sufficient outcome was not produced within the limited research period. However, the study suggested an efficiency of integrating narrative approach and interactional analysis.

研究分野：応用言語学

キーワード：identity ELF interactional analysis narrative approach

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、言語学習を社会的過程として捉え、それを学習者本人の視点から考察する研究が盛んになっている。そしてそのなかで発展してきたのが、第二言語 (L2) 学習者の identity に関する研究である。

学習環境が劇的に変化する海外留学は、L2 学習者の identity 構築にとって非常に重要な経験となる。先行研究では、例えば海外留学を通じた「国際社会の一員」のような肯定的な identity の構築が学習者の様々な能力の向上を促すこと (Benson et al., 2013; Jackson, 2010) や、反対に留学時に肯定的な identity を構築できなかったために他文化の拒絶や自文化への傾倒が深まること (Hashimoto & Kudo, 2011; Isabelli-Garcia, 2006; Kinginger, 2004) などが報告されている。

ところで、高い言語能力を身につけた L2 学習者であっても、必ずしも母語話者 (NS) モデルに沿った言語運用をするわけではない。なぜなら L2 学習者は、自らの identity を表現するために NS モデルに抗した語用論的 L2 運用を行うこともあるからである (Ishihara, 2010; Iwasaki, 2010; Siegal, 1996)。L2 で「自分らしい」表現をできるようになること、また英語に関していえば、事実上の国際共通語としての多様性に対応できるようになることが、今日の L2 学習者には求められている。このように語用論的 L2 運用とは、L2 学習者の identity が強く反映される実践なのである。

これまで研究代表者は、日本人英語学習者における identity 構築および identity の語用論的 L2 運用への反映の様相を調査する研究を行い、調査対象者の identity と語用論的 L2 運用とのあいだに密接なつながりがあることを明らかにしてきた (Nogami 2011)。しかしながら、海外留学のような長期にわたる言語学習における identity 構築の過程や語用論的 L2 運用の変容、あるいは実際の L2 インタラクション中の言語運用と identity 表現の関連性については、調査がおよんでいなかった。

2. 研究の目的

「1. 研究開始当初の背景」で述べた背景および研究代表者による事前の研究をもとに、本研究では海外留学における L2 学習者の identity 構築の過程および L2 学習者の identity と語用論的 L2 運用の関係性の 2 点を明らかにすることを主たる目的とした。

まず について、日本人留学生の長期留学前後を通じた identity 構築の過程を、ナラティブ研究 (narrative approach) および談話研究 (interactional analysis) によって考察することを第一の課題とした。特に調査対象者の英語に対する態度や信条、あるいは国際社会の中での英語話者としての自己認識などが、留学経験によってどのように変容しうるのか、またそうした変容は identity の構築にどのように影響しているのかに焦点をあてることにした。

次に について、留学前後での語用論的 L2 運用の変化を調査し、identity と語用論的 L2 運用の関係性を検証するためのケーススタディを、第二の課題とした。例えば留学前は NS を基準として L2 を使用していたが、留学後は NS のようにではなく、自分らしい表現をしたいと望むようになったなど、実際の語用論的 L2 運用における調査対象者の identity の反映を過程的に分析することを目指した。

3. 研究の方法

「2. 研究の目的」に記した目的に応じた研究方法として、本研究では留学先において英語を使用している日本人留学生を対象に、半構造化インタビュー、日記観察、実際の言語使用データの収集といった調査を実施した。

ではまず事前準備として、調査対象者の英語学習経験や海外渡航経験、英語に対する考え方といった背景情報を問うものと、様々な状況設定においてどのような英語の発話をするのかを問うものの 2 種類のアンケート調査を行なった。インタビューの質問項目は主にアンケート内容に関する問いと、 の録画データにおける実際の言語使用に関する問いで構成した。録音したインタビューデータのトランスクリプションを作成し、 のデータと合わせて、解釈学的方法によってその内容を分析した。

次に では、調査対象者の identity 構築の過程を観察するために、およそ 2 週間に 1 回の頻度で、留学中の日常的な L2 インタラクションへの参与に関する気づきを日記形式で記してもらった。また日記の内容に研究代表者がコメントや質問を加え、それに対する回答も得た。こうしたやりとりは、調査対象者の経験や見識をより深く理解するのに有用な手段であるとともに、研究する側と研究される側の適切な関係を維持・構築することにも寄与していた。

最後に では調査対象者とその友人たちによる英語インタラクションの様子を、専用機器を用いて録画した。録画データは続く のインタビュー調査用の資料としたあと、その内容を質的に分析した。また調査対象者の友人たちに対しても、 と同様に録画データに関するインタビュー調査を行なった。

4. 研究成果

(1) 実際の言語使用データから

本研究の成果の例として、ここではまず教育媒介言語が英語(EMI)であるコスタリカの大学院にて収集した言語使用データのなかから、translanguaging (Garcia & Wei 2014)と呼ばれる多言語話者のフレキシブルな多言語資源使用が起こった場面を取り上げることとする。Hisa (日本人男性、30代半ば)、Sun (ラオス人女性、20代後半)、Sky (アメリカ人女性 20代半ば)の3名による英語インタラクシオンにおいて、Sunのくしゃみに反応したSkyとHisaが、間髪いれずに「salud」と声をかけるといったことがあった。スペイン語で「健康」を意味するsaludは、スペイン語圏においては誰かがくしゃみをした際に「健康に気をつけて」という意味を込めてかけられることばでもある。

くしゃみをした者への周りの反応という文化的実践は、お互いの連帯感の確立と証明、換言すればグループ内での集団同一性(in-group identity)の形成につながっていると考えられることができる。また上記の場面の前までの会話は、当然のことながら英語で進んでおり、同場面の後も何事もなかったかのように英語での会話が続けられた。こうしたtranslanguagingは、このグループ内で参加者それぞれが多文化多言語アイデンティティを実践している(Gu, Parkin & Kirkpatrick 2014)ことの表れとみなされる。さらには、SkyとHisaがほぼ同時にsaludと反応したこと、Sunがそれに対して特段の反応を見せなかったことから、上記の文化的実践がすでに彼ら/彼女らの日常生活においてあたり前になっているとも判断できた。英語での会話の最中に、また英語圏にもくしゃみに対してかけることば(bless you)が存在しているにも関わらず、3名がともにスペイン語圏の文化的資源を何気なく使用していることは、非常に興味深かった。

(2) インタビューデータから

続いて、(1)で例示した場面に関する調査対象者の語りを参照する。Hisaは、なぜSunのくしゃみにsaludと言ったのかという質問に対して、英語のbless youを使用することを問題だと思っているからだと言ってくれた。Hisaの語りからは、たとえ所属する大学院のコースがEMI環境にあったとしても、多様な文化・言語的背景を持った学生が世界中から集まっていることに鑑みて、西洋の宗教的価値観を含んだbless youの使用は避けたいという彼の思いが読み取れた。またHisaはsaludに宗教的な背景がなく、ただ人の健康を願うという意味があるということを学んでおり、そうした学びを自身に内在化したうえで言語使用の選択を行っていたこともわかった。

Hisaは20代の頃から様々な国へ渡航し、またそこで生活するなかで、多様な価値観にふれることを通じて自己を内省してきた経験を有している。例えばコスタリカの大学院での生活を通じて、人について判断する価値基準がpolitenessからfairnessに変わってきたという語りがあった。Hisaにとって、母国の日本では「丁寧」であることがその人をいい人であると判断する「基準」になっており、コスタリカ渡航以前はそのような「基準」が一般的だと考えていた。しかしコスタリカの大学院での経験から、彼は“B is a polite person.”は“B is a nice person.”とは必ずしも結びつかないということに気づいたという。fairnessとは他者のいうことに賛成か反対かは関係なく、誠意を持って耳を傾け理解を深めようとする姿勢を持つことであり、Hisaはpoliteでいることよりもfairな人間でいたいという感覚を持つようになったのだと語っていた。このようにHisaは、多文化多言語環境における英語でのコミュニケーションにおいて固定的な価値観に囚われることなく、ことばを「自分のもの」として使えるようになるうとしてきたのだと考えられた。

(3) 日記観察から

次に、日記観察の調査から得られた成果を要約しておきたい。この調査では、留学をする者が留学先で構築する社会的ネットワークの幅広さや質が、自己の捉え方に大きな影響を与えていることが明らかになった。特に多様な言語文化背景を持った人々とのインタラクシオンの機会を多く持つこと、そしてそれらのインタラクシオンを意義あるものと感じられていることが、留学をする者にとって多言語話者としての肯定的な自己像や異文化コミュニケーションの理解に寄与していると考えられた。

またこの調査のなかには、英語圏ではない留学先における現地語の学習が留学中の困難を乗り切る拠り所となったり、留學生の母語を資本とした活動が社会的ネットワークを広げる一助となったりするといった例があった。こうした例からは、留学先がどこであろうとも「英語」の学習が過度に強調されるきらいのある日本の大学において、多文化多言語社会を前提とした教育を展開していくことの必要性が示唆された。

(4) まとめおよび今後の課題

(1)(2)(3)の事例は、「2. 研究の目的」に挙げたL2学習者のidentity構築の過程の一端を描き出したものであるといえる。(1)(2)に関して、多様な背景を持つ英語話者同士の会話において、その参加者は互いに様々な言語・文化・記号論的資源を使用することで他者の

ジショニングを行い、多文化多言語的な identity を形成し合うとされる (Gu, Parkin & Kirkpatrick 2014)。本研究におけるデータは、こうした英語インタラクションの実際的な特徴を示すものとして、その意義を認めることができる。また(3)に関して、学生が留学先で構築する社会的ネットワークの重要性を明らかにしたという点で、本研究は留学の機会を提供する大学教育の今後のあり方を考える契機をもたらすものと位置づけられる。

一方で、「2.研究の目的」の L2 学習者の identity と語用論的 L2 運用の関係性に関しては、本研究期間内に十分な成果を上げることができなかった。その原因として、研究代表者が産前産後休業を取得したことや新型コロナウイルスの影響のほかに、語用論的 L2 運用を調査するアンケート調査に実際の言語使用状況を反映することの限界が挙げられる。したがって今後の研究においては、アンケート調査に代わる事前調査の方法を検討しなければならない。

また に関して、本研究では時間的・環境的な制約のある海外フィールドワークにおいて、インタビュー調査の前に言語使用データの詳細な分析を行うことの困難さに直面した。今後は本研究で得られた知見をもとに、調査地での簡便な作業を可能とする分析フレームを確立し、それにもとづいた分析結果に関する質問を組み込んだインタビュー調査および考察へとつなげられるような研究デザインが必要になると思われる。そしてその具体的な方法論として、どのようにしてナラティブ研究と談話研究を効果的に融合させていくかが課題となるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Yoko Nogami	4. 巻 -
2. 論文標題 Study Abroad, Identity, and Attitude toward the English Language	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 English as a Lingua Franca in Japan: Towards Multilingual Practices	6. 最初と最後の頁 157-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoko Nogami	4. 巻 -
2. 論文標題 Understanding the ELF Phenomenon through Narrative Inquiry: A Diary Study on Identities of Japanese ELF Users	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ELF Research Methods and Approaches to Data and Analyses: Theoretical and Methodological Underpinnings	6. 最初と最後の頁 241-257
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoko Nogami	4. 巻 5
2. 論文標題 A Narrative Approach to ELF-focused Research: Diary Study for Investigating Identity Construction of Japanese ELF Speakers	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Waseda Working Papers in ELF (English as a Lingua Franca)	6. 最初と最後の頁 136-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野上陽子	4. 巻 -
2. 論文標題 共通語としての日本語への意識調査 国際共修の場におけるインターアクションを通して	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 2016 CAJLE Annual Conference Proceedings	6. 最初と最後の頁 221-229
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 野上陽子
2. 発表標題 共通語としての英語（ELF）を介した内集団における連帯と多文化アイデンティティの構築 ことばの相互行為分析とナラティブ分析の経過報告
3. 学会等名 関西学院大学法学部外国語研究室研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yoko Nogami, Mayu Konakahara, and Ayano Shino
2. 発表標題 ELF in Educational Settings in Japan
3. 学会等名 13th International Conference of English as a Lingua Franca (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yoko Nogami
2. 発表標題 Attitude change toward English language learning and negotiation of sense of self through study abroad
3. 学会等名 JACET ELF SIG Meeting (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野上陽子
2. 発表標題 L2-related identity and pragmatic language use in the era of English used as a lingua franca
3. 学会等名 関西学院大学法学部外国語研究室研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoko Nogami
2. 発表標題 A Case study on Japanese university students' awareness on successful ELF Communication: Through interactional experiences in multicultural co-learning environment
3. 学会等名 the JACET 56th International Convention, Aoyama Gakuin University (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoko Nogami and Mitsuko Takei
2. 発表標題 Investigation on awareness of speakers of English and Japanese as lingua francas: Through interactional experiences in multicultural co-learning environment in a Japanese university
3. 学会等名 ELF10, University of Helsinki (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 野上陽子
2. 発表標題 共通語としての日本語への意識調査：国際共修の場におけるインターアクションを通して
3. 学会等名 CAJLE Annual Conference 2016 in Niagara Falls (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Yoko Nogami & Mitsuko Takei
2. 発表標題 Investigation on awareness of speakers of English and Japanese as lingua francas: Through project-based multicultural co-learning at a Japanese university
3. 学会等名 ELF and Changing English: 10th Anniversary Conference of English as a Lingua Franca (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoko Nogami
2. 発表標題 A Case Study on Japanese University Students' Awareness on Successful ELF Communication: Through Interactional Experiences in Multicultural Co-learning Environment
3. 学会等名 JACET 56th International Convention (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 Yoko Nogami	4. 発行年 2020年
2. 出版社 DE GRUYTER MOUTON	5. 総ページ数 350
3. 書名 Identity and Pragmatic Language Use: A Study on Japanese ELF Users	

1. 著者名 Mayu Konakahara, Keiko Tsuchiya, Yoko Nogami, Nobuyuki Hino, Masakazu Iino, Barbara Seidlhofer, Henry Widdowson, Ayako Suzuki, Tomokazu Ishikawa, Tetsuo Harada, Akiko Otsu, Masaki Oda, Yasutaka Yano, Yukako Nozawa, Miyuki Takino, Ayano Shino, Akiko Otsu	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 358
3. 書名 English as a Lingua Franca in Japan: Towards Multilingual Practices	

1. 著者名 Kumiko Murata, Yoko Nogami, Henry Widdowson, Barbara Seidlhofer, Alessia Cogo, Anna Mauranen, Sayoko Maswana, Marie-Luise Pitzl, Lixun Wang, Ying Wang, Jagdish Kaur, Kaisa Pietikainen, Alan Thompson, Masuko Miyahara, Tomokazu Ishikawa	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 321
3. 書名 ELF Research Methods and Approaches to Data and Analyses: Theoretical and Methodological Underpinnings	

1. 著者名 Kumiko Murata, Jennifer Jenkins, Clarissa Menezes Jardim, Maria Kuteeva, Joo-Kyung Park, Masakazu Iino, Ute Smit, Patrick Ng, Jaroslaw Kriukow and Nicola Galloway, Mayu Konakahara, Yoko Nogami, Ying Wang, Nobuyuki Hino, James D'Angelo, Masaki Oda, Elana Shohamy	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 302
3. 書名 English-Medium Instruction from an English as a Lingua Franca Perspective: Exploring the Higher Education Context	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------